

博物館における入館者の分析的研究

— 6周年を迎えた地質標本館の場合 —

The Analytical Research for the Visitors in Museum
— in the Case of the Geological Museum, Reaching the
Sixth Anniversary of the Opening —

神 戸 信 和*
Nobukazu KAMBE

The purpose of this research is to make clearly the variation of visitors to the Geological Museum belonging to the Geological Survey of Japan, in TSUKUBA Science City, Japan by the analytical research for visitors.

The contents of this paper are as follows:

1. Introduction,
2. The yearly variations of visitors,
3. The yearly and regional variations of visitors,
4. The yearly, occupational and scholastic variations of visitors,
5. The monthly variations of visitors,
6. The yearly and monthly variations of the group and personal visitors,
7. Conclusion.

1. はじめに

これから論じようとする地質標本館は茨城県下の筑波研究学園都市に位置し、通商産業省工業技術院地質調査所に所属する一般公開施設で、地質調査所の研究業務を紹介し、あわせて地球科学を一般に普及することを目的として昭和55年に設立された。一方では閉ざされた学園都市のイメージを開かれた学園へのイメージ・チェンジをはかる役割をも担って一般公開されていると言っても過言ではない。

昭和55年8月19日から一般公開に踏み切った地質標本館は今年で6周年を迎え、その間、昭和57年9月30日の地質調査所100周年記念筑波式典には多くの関係者を、昭和58年6月8日には皇太子殿下、美智子妃殿下、浩宮殿下をお迎えし、昭和60年3月17日から同年9月16日まで行われたEXPO'85-TSUKUBAの機会には諸外国から多くの方々を、さらに開館以来、政界、官界、学界、財界、一般から多くの見学者を迎えて、筑波研究学園都市

の目玉として、あるいは学園の顔としての位置を着実に築きつつあると言える。工業技術院や地質調査所の顔としては今更言うまでもない。

このように一般公開し、着実に所期の目的を達しつつある地質標本館は、開館1年目の昭和56年9月4日には3万人目の、昭和57年5月18日には5万人目の、開館3年目の昭和58年9月3日には10万人目の、開館6年目の昭和61年10月14日には20万人目の入館者を迎えている。

これから項を追って、これらの入館者について、いろいろな角度から分析し、その分析データの因ってきた原因あるいは根拠を追究し、今後、地質標本館の入館者をいかにして保持していくか、あるいは更に発展させるにはいかなる方策を講じたらいかなどについて言及する。

2. 開館以来の入館者数の年別変動

さて、これから本論にはいり地質標本館の開館以来の

* かんべ のぶかず 通商産業省工業技術院地質調査所地質標本館長
連絡先 〒164 東京都中野区中央2-49-11

入館者数の年別変動について述べることにするが、そこで問題になるのは年別変動で取り扱う“年別”とは何ぞやということである。開館の時期が1月1日であるとか、あるいは4月1日という場合には比較的問題は少ないと思うが、地質標本館の開館は8月19日というように年度の途中であったのである。

想定される“年別”は1月1日～12月31日、4月1日～翌年3月31日、8月19日～翌年8月18日の3つのケースである。この3つのうちどれを採っても妥当であり、それぞれ意義がある。さて地質標本館の場合にも、上記

の3つのケースのうちどれによっても適切であり、それぞれそれなりの意義をもっていると言えよう。しかし、もし1つのケースを選ぶことになると、これまた考えさせられる課題である。

今回の場合には、地質標本館が国立の一般公開施設で、国家予算により運営されていることを考慮にいれて、4月1日～翌年3月31日を基準に“年別”として議論を進めることにする。しかしこの場合においては、開館の55年度は昭和55年8月19日から昭和56年3月31日までとして取り扱う。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
昭和55年度					3,233	2,130	4,137	3,369	1,087	879	1,269	1,622	17,726
昭和56年度	2,398	2,378	2,144	2,160	3,200	2,104	4,426	2,750	1,066	765	1,741	2,367	27,499
昭和57年度	2,633	3,176	2,794	3,070	4,688	3,264	5,284	4,185	1,231	594	1,362	4,214	36,495
昭和58年度	3,261	3,683	4,133	2,679	4,194	3,078	4,613	4,588	1,508	739	1,875	3,128	37,479
昭和59年度	3,804	5,787	4,386	2,783	5,584	2,420	5,784	5,204	1,570	1,202	1,894	2,681	43,099
昭和60年度	1,603	2,223	2,369	2,387	2,906	1,529	3,394	2,162	744	588	1,164	1,448	22,517
昭和61年度	2,106	2,810	2,170	1,526	3,186	1,930	3,988	3,269					20,985

表-1 昭和55年8月～昭和61年11月の各月別入館者数および年度別累計（単位は人）

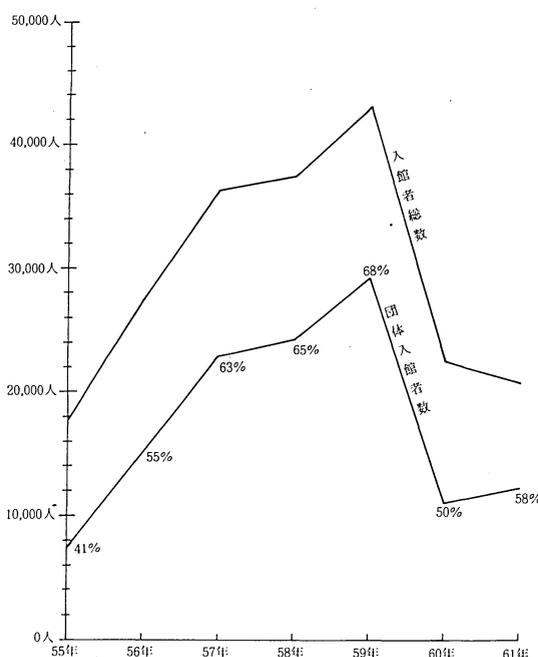


図-1 昭和55年度～昭和61年度の各年度別入館者総数（上段）および各年度別団体入館者数（下段）と後者の前者に対する比率

このような“年別”を基準としてグラフに表わすと図-1のごとくなる。すなわち、これは下記“年別”の入館者数をグラフにしたにすぎないのである。

- 55年度（55年8月19日～56年3月31日） 17,726人
- 56年度（56年4月1日～57年3月31日） 27,499人
- 57年度（57年4月1日～58年3月31日） 36,495人
- 58年度（58年4月1日～59年3月31日） 37,479人
- 59年度（59年4月1日～60年3月31日） 43,099人
- 60年度（60年4月1日～61年3月31日） 22,517人
- 61年度（61年4月1日～61年11月30日） 20,985人

このグラフを見ると、55年度は年度途中からの開館なので、55年度と56年度との比較はできない。56年度と57年度では約9,000人の増加が実現し、57年度と58年度ではわずかに約1,000人の増加で横ばい状態であったが、58年度と59年度では約5,500人の増加をみ、年度別に統計的にみた場合、59年度は43,099人という開館以来最多の入館者数を記録した。

このような入館者数の変動の原因を探ってみると、57年度の入館者数の急増は、開館以来地質標本館が、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、ロコミなどによるP・Rに徹底してきたものと考えられるが、もうひとつの要因は60年3月17日から6ヶ月間にわたって筑波研究学園都市にお

いて国際的なイベントであるEXPO'85-TSUKUBA, すなわち筑波科学万博が行なわれることが国内は勿論のこと, 世界に向かって呼びかけられたことによるものであろう。そして, 59年度の急増は, とくに科学万博への出展者および協力者あるいは後援者および関係者の万博予定地などの見学と並行して, 周辺に位置し一般公開されている地質標本館の見学が組み込まれたことによるものであろう。

60年度については約20,500人の急激な減少となった。このことについては, 当初急増することも十分に予想されたのであるが, 結論としては筑波研究学園都市を目的とした見学者の大部分が, 科学万博を目標としたことにもとづくものであろう。しかしながら, 61年度について

は現在年度の進行途中であり, 早期に結論を述べるわけにはいかないが, 61年11月30日までに20,985人の見学者があり, 現在再び恢復の状態に向かっていると云えるのである。

3. 開館以来の地域別入館者数の年別変動

前項では開館以来の入館者数の年別変動をグラフで見ながら, その年々変動を考察してきたのであるが, 本項では開館以来毎年入館者がどのような地域から来た見学者であるかということに焦点をあてて, 地域別入館者数の年別変動を図-2および図-3のグラフで見ながら, その年々変動を考察することにする。

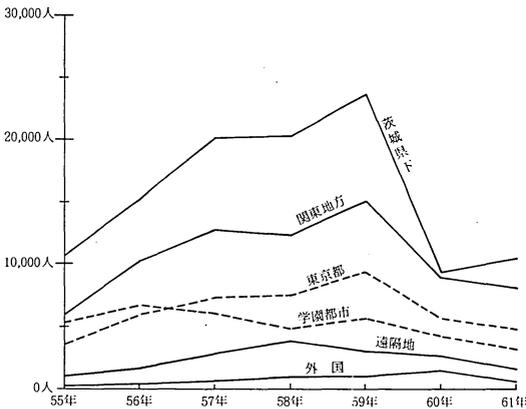


図-2 昭和55年度～昭和61年度の各年度地域別地域別入館者数

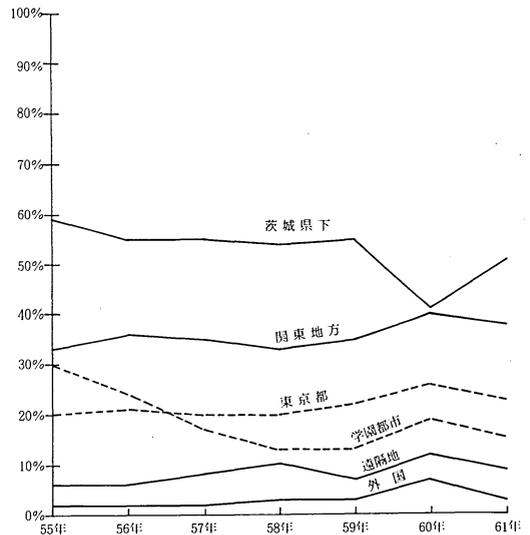


図-3 昭和55年度～昭和61年度の各年度地域別入館者数の各年度別入館者総数に対する比率

まず入館者をどのような地域に分類して考察するかであるが, あまりに小地域, 例えば市町村または区の単位に分類することは分析をかえって複雑にする結果となるので, 本項では次のような地域別, すなわち, a. 茨城県下(地質標本館が筑波研究学園都市に位置するので研究学園都市地域からの入館者数は破線により表示したが, 茨城県下の入館者数には学園都市地域からの入館者数を含めてある), b. 関東地方(東京都からの入館者数は破線により表示したが, 関東地方の入館者数には東京都地域からの入館者数は含め, 茨城県下は除いてある), c. 遠隔地(関東地方を除く日本国内), d. 外国の諸

地域に分類した。

55年度から61年度までを通じて言えることは, 入館者数の多い方から述べると, 茨城県下, 関東地方, 遠隔地, 外国の順で, この順序は毎年度変動がないということである。しかしながらグラフを詳しく見てみると, 開館当初の55年度, 56年度では多い方から学園都市, 東京都の順であった入館者数だが, 57年度は全入館者の急増にも拘わらず, 多い方から東京都, 学園都市の順に逆転し, この逆転は61年度まで継続している。このことは, とくに茨城県下の入館者が開館当初は, その50%が学園都市の入館者で占められていたにも拘わらず, 57年度以降は学

園都市の入館者がほぼ30%に減少したことによるものである。ただし、60年度は茨城県下の入館者数は急減しているにも拘わらず、学園都市の入館者が50%を占めていることは、学園都市関係の入館者数の比較的安定性を物語るものであると言えよう。

59年度の入館者数を最高に60年度は急減しているが、この原因については前項で論じたように科学万博による影響が極めて大きい。なかでも60年度の茨城県下の入館者数の急減は特筆に値する。さらに特筆すべきことは、毎年入館者総数が59年度をピークに増加しつづけたが、60年度は急減し、61年度は再び増加の現象を呈しているなかで、外国からの来館者についてであるが、55年度から59年度まで、304人、550人、796人、1,051人、1,151人と増加しつづけて、60年度はさらに増加し1,552人に達し、61年度は進行中であるが11月30日には698人に達していることである。このことは筑波研究学園都市あるいは地質調査所の国際性あるいは国際交流の豊かさを物語ると同時に、60年度に行われた科学万博による影響の大きいことを証明するものと思料する。

なお、60年度は入館者総数が急減しているにも拘わらず、外国からの来館者のみ急増したことは、科学万博時には国内の見学者の多くは科学万博の見学を優先し、外国の見学者は科学万博の見学は勿論のこと、この機会に是非とも地質標本館の見学も実現しようということであったに違いない。

さらに地域別入館者数を年度毎の総入館者数と比較して、パーセンテージを見ることにすると、55年度から59年度までは、a. 茨城県下=59%~54%、b. 関東地方=36%~33%、c. 遠隔地=10%~6%、d. 外国=3%~2%と全般的に多少の上下はあるもののほぼ横ばいであったが、60年度は、a. 茨城県下は41%に激減した以外、b. 関東地方が40%に、c. 遠隔地が12%に、d. 外国が7%というようにいずれも比率は上昇している。このことは入館者の地域的傾向が科学万博を契機に茨城県以外の地域に移動していることを意味するものであるが、61年度の結果を見ないとわからないが、茨城県下の入館者数がどのように回復するかは大変興味ある課題である。

以上のような地域別入館者の年別変動が、今後さらに茨城県以外の地域で増加するとするならば、これは地質標本館が茨城県下においてのみ重要視されているのではなく、関東一円、ひいては日本の遠隔地あるいは諸外国にもその存在が認知されつつあることを意味するものと解釈され、その意義はいろいろな意味において重要性を

有するものである。

4. 開館以来の職業別・学業別入館者数の年別変動

地質標本館設立目的のひとつには、陳列展示内容のレベル目標をどこにおくかということがあって、このことについては地質調査所内に設置された地質標本館レーアウト小委員会（昭和48年4月1日発足、委員長神戸信和）では主要議題としても取り上げられた。その結果、展示内容のレベル目標を中学校高学年から高等学校生徒の見学者を対象におくことが決定され、展示テーマの選び方、展示レーアウト、展示基本設計、展示実施設計の方向は、すべてレーアウト小委員会で決定された上記の見学者を対象にしたレベル目標にしたがうことになった。

以上のような経過から、開館して果してどのような職業の人が、どのような学校・学年の生徒が見学に来るかは、われわれ地質標本館の設立計画に直接参画したものにとって重要な関心事であった。

したがって本項では開館以来毎年どのような職業の人が、どのような学校の生徒が見学に来ているかということに焦点をあてて、職業別・学業別入館者数の年別変動を図-4および図-5のグラフで見ながら、その年々変動を考察することにする。

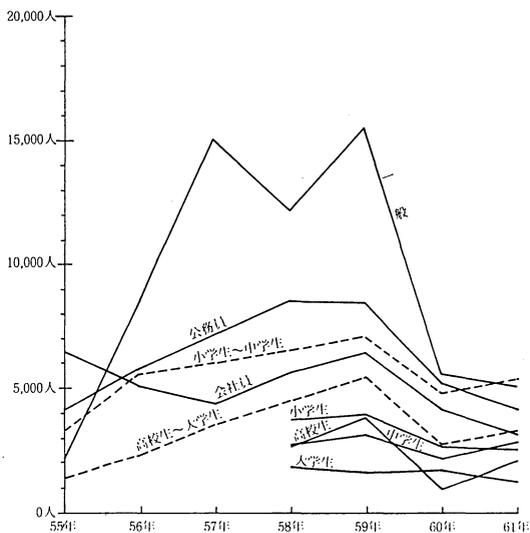
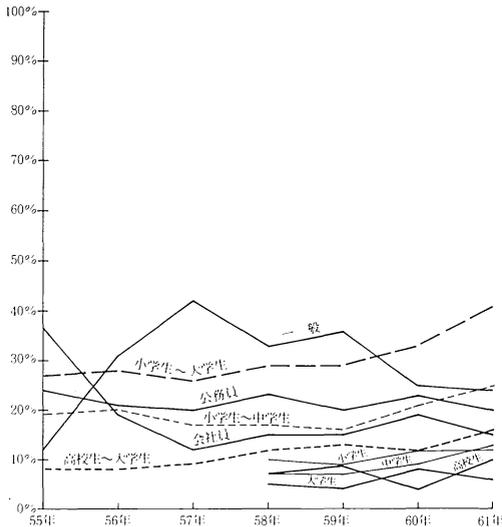


図-4 昭和55年度～昭和61年度の各年度職業別・学業別入館者数



図一 5 昭和55年度～昭和61年度の各年度職業別・学業別入館者数の各年度別入館者総数に対する比率

まず入館者をどのような職業別、学業別に分類して考察するかであるが、前項と同様にあまり細分して、例えば国家公務員、地方公務員、民間会社の業種別単位に分類することは分析をかえって複雑にする結果となるので、本項では、a. 一般(各市区町村などが主催する熟年生涯学級あるいは婦人学級などを含む)、b. 公務員(国家公務員、地方公務員を含む)、c. 会社員、d. 大学生、e. 高校生、f. 中学生、g. 小学生に大分類し、これにしたがいグラフに表示して考察を進めることにする。

まず開館の55年度をみて、入館者数の多い順から述べると、会社員の6,540人(37%)を筆頭に、公務員の4,187人(24%)、中学生・小学生の3,364人(19%)、一般の2,159人(12%)、大学生・高校生の1,476人(8%)の順となっている。56年度は一般の8,527人(31%)を筆頭に、公務員の5,830人(21%)、中学生・小学生の5,614人(20%)、会社員の5,197人(19%)、大学生・高校生の2,331人(9%)の順となり、55年度に比較すると会社員が減少し、一般が増大し、57年度から60年度までは一般を筆頭に、公務員、会社員の順となっている。なお、小学生、中学生、高校生および大学生の入館者はグラフに示されるように年度によって多少の変動があるのがうかがえる。一般的には小学生を筆頭に中学生、大学生の順で、高校生についての年度別変動は大きい。高校生は科学万博に

向けて、地質標本館をも含めて興味を示したものと考えられる。

さらに60年度には一般が、ほかの公務員、会社員、学生、生徒に比較して急激に減少している。なお、パーセンテージのグラフを見ると、55年度から60年度にかけて、公務員は大きな変動を示さないが、一般の変動は顕著で、57年度をピークに減少しつづけている。このことは、地質標本館の陳列展示の内容、レベルが熟年層、婦人層には比較的相応しないのではないかとということが考えられ、かつ新しく開館したこの種の自然史あるいは地球科学系博物館に対する関心が、比較的に低いことを示すものではなからうかと考える。会社員は開館当初は最上位で興味を示した反面、57年度には谷底を示したが、再び科学万博に向けて上昇し、さらにその後も上昇を続けていることは、筑波研究学園都市に民間の工業団地が誘致されたり、あるいは各種のフォーラムやシンポジウムが開催されていることと合致するものと考えられる。

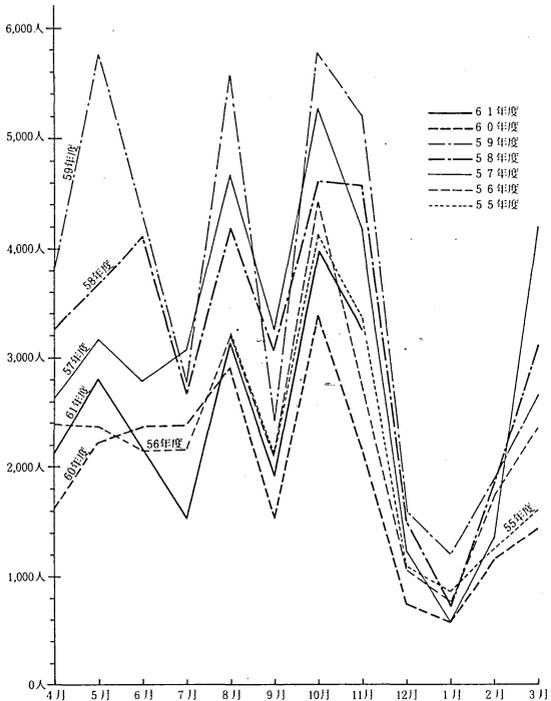
さらに、小学生～大学生全般をみた場合には、55年度から60年度にかけてわずかつづではあるが上昇しているのがみられ、60年度には最上位に位置づけられる。このことは地質標本館のレーアウトの際に検討した陳列展示のレベル目標を、中学生上級～高校生においたことと合致するわけで、ようやくその目標設定の意義が60年度になって数字やグラフによって示されたものであると考えられる。なお、大学生の大部分は理工系であり、しかも多くは地球科学系の学生で占められているのも極めて重要である。

61年度は現在進行途中であるが、60年度にも増して学校関係の団体や個人の入館者が増加の傾向にあり、地質標本館設立の意義と目標設定の意義が十分に生かされていることを喜ぶと共に、今後もさらにそのような設立目標に向かって、そしてそれを実現すべく多くの努力を続けることが極めて重要であることを強調する。

5. 開館以来の入館者数の月別変動

前項までは開館以来の入館者数について、年別変動、地域別年別変動および職業別・学業別年別変動をそれぞれグラフで表示し、その変動は何を意味するかを検討してきた。

本項では開館以来の入館者数が毎月どのように変動してきたかを図一6のグラフで見ることとする。



図一六 昭和55年度～昭和61年度の各月別入館者数

全体を通覧して、55年度から61年度まで毎年みた場合に、56年度4月のピーク時、58年度6月のピーク時、および60年度はこの時期にピーク時がないのを除くと、入館者数のピーク月が年間に3つ、すなわち毎年5月、8月、10月にあるのが特徴である。各ピーク月の入館者数の順をみると下記の通りである。

5月は59年度、58年度(この年度は6月であるが)、57年度、61年度、56年度(この年度は4月であるが)、60年度(この年度はこの時期にピーク時がない)の順である。

8月は59年度、57年度、58年度、55年度、56年度、61年度、60年度の順である。

10月は59年度、57年度、58年度、56年度、55年度、61年度、60年度の順である。

さらにピーク時を年度別に分析すると、59年度、58年度、57年度は上位に、61年度、60年度、56年度、55年度は下位にある。このことは入館者数の年別変動の順位とほぼ合致する。すなわち、入館者数が開館年度から科学万博の直前の59年度まで増加の一途をたどったことと符合して興味深い。その後、科学万博時の60年度には激減

し、61年度には激増とまではいかないが再び上昇路線をたどっていることと符合する。

なお、毎年5月、8月、10月にピーク時があることは、まさに5月は好天の見学日和に恵まれた修学旅行あるいは行楽シーズンであり、8月は学校がいっせいに休暇になるのと、研究学園都市へ学生が帰省したり、個人の旅行者の出入りが多いことを示すもので、10月は5月と同様、好天の見学日和に恵まれる月で、修学旅行あるいは行楽シーズンであることを意味している。5月、8月、10月にピーク時があることは全国的な傾向と合致する点で、地質標本館のみが例外ではないということである。

さて、それでは入館者数の谷間の月はどうであろうか。グラフで見ると、7月、9月、1月がこれに相当するのである。この特徴は、毎年5月、8月、10月のピーク時入館者数の分布幅が各年度の入館者数に支配されて、意外にも大きいのに比べ、7月、9月、1月の谷間月入館者数の分布幅は意外に小さいというのに気がつくのである。

それはともかくとして、1月に谷間があらわれることは、まさに1月は寒気と、それに伴い人の移動が少なく見学には不適であるということと相関するものであると言える。なお、総体的に12月、1月、2月の3ヶ月間は入館者数が極めて少ない。7月、9月に谷間があることは意外であるが、これを解釈するならば7月は学校関係の夏休みが一般に後半から始まるところが多いことと関連し、本格的な旅行シーズンを迎えていないことを意味し、9月はむしろ一般に学校が月の始めから開始されることに起因するのではなからうか。

6. 開館以来の団体別・個人別入館者数の年別変動と月別変動

地質標本館では入館者の取り扱い区分を、入館者調整のために団体と個人とに分けている。すなわち、15人以上の見学者が集団で入館見学する場合には、1週間前までにあらかじめ申込みを原則に団体として、15人以下の場合などでも入館者名簿が提出される時には一般に団体として取り扱っている。通例、これ以外に入館は個人入館者として取り扱っている。

本項では上に述べたような原則にしたがって、団体別・個人別入館者数の年別変動と月別変動について図一1、図一7、図一8を参照して考察を進めることとする。

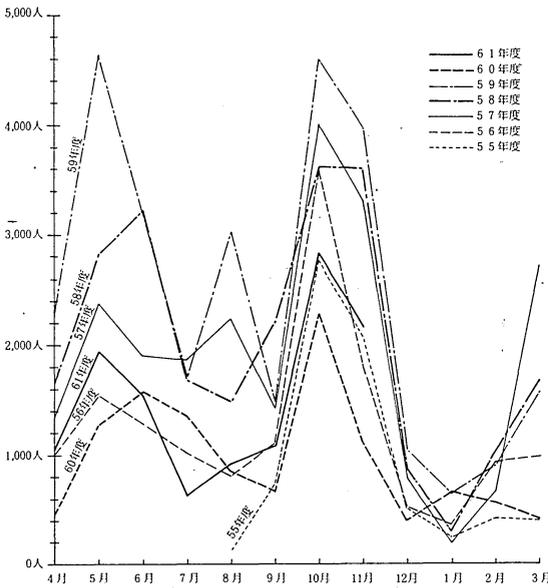


図-7 昭和55年度～昭和61年度の各月別団体入館者数

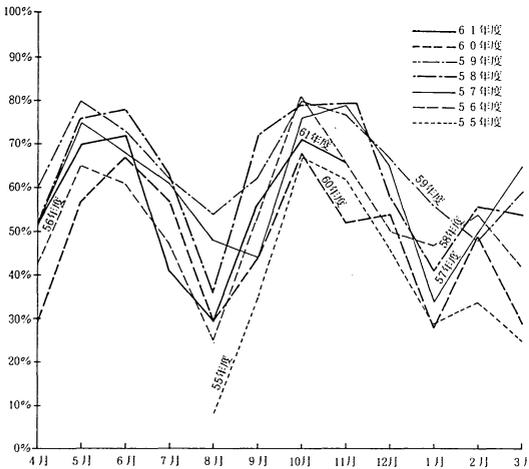


図-8 昭和55年度～昭和61年度の各月別団体入館者数の各月別入館者総数に対する比率

まず図-1を見ると、55年8月から61年11月までの年度別入館者数と年度別団体入館者数および年度別団体入館者数の年度別入館者数に対する比率が示されている。団体入館者数は55年度の7,318人(41%)を例外とすれば、56年度から61年度まで毎年10,000人を超過し、しかも比率は50%を超過し、59年度には年度の68%に相当する

29,209人が団体として入館していることになる。59年度まではグラフで見られるように団体入館者は人数からも比率の上からも増加の一途をたどったということが言える。60年度には急激に68%から50%に低下したが、61年度には再び増加のきざしがみられ、11月30日までの数字では入館者総数20,985人のうち団体入館者数は12,230人で、58%となった。

上記の数字から、入館者の約2/3は団体入館者で占められ、団体入館の意義は極めて大きく、地質標本館の今後の運営においてもこのことを十分に認識する必要がある。

さて、さらに図-7と図-8により、55年8月から61年11月までの各月団体入館者数の変動と、各月団体入館者数の各月入館者数に対する比率の変動を見て、その意義を考察することとする。

図-7を見ると、各月団体入館者数はそれぞれの年度によってかなりの変動があることがわかるが、全体を通覧すると特徴的な相似性があるのに気が付くのである。それは団体入館者数が多い月と少ない月とがほぼ一致していることである。多い月は5月と6月で、なかでも5月は59年度、57年度、61年度、56年度の順に、6月は58年度、60年度の順に多く、それぞれピークを示している。さらに10月は特徴的に多く、その順は59年度、57年度、58年度、56年度、61年度、55年度、60年度である。11月は10月について多くの団体入館者を迎えている。これに反して、7月、8月、9月、12月、1月は少ない。3月から4月にかけては増加の傾向にある。しかしながら59年度と57年度の8月はピークを表わしている。

図-6、図-7および図-8のグラフ、すなわち各月入館者数、各月団体入館者数および各月団体入館者数の各月入館者数に対する比率のそれぞれのグラフを比較してみよう。各月入館者数と各月団体入館者数のグラフを比較すると、意外に相似性のあるのに気がつく。ことに4月～7月、9月～3月は極めて相似的で類似的であると言える。すなわち、上記の期間については各月入館者数と各月団体入館者数との比率が多少の変動はあるものの、一般的にみて比例しているとみるべきであろう。ただし、8月については上記の期間とは違い相似性があるとは言えない。このことは各年度の8月について言うことであるが、入館者数が多いにも拘わらず、団体入館者数が少なく、個人入館者数が多いことに起因するとみるべきである。

さて、図-8により各月団体入館者数の各月入館者数に対する比率のグラフを見てみよう。先に述べた8月の

現象はこのグラフによって納得することができるのである。すなわち、図-6の各月入館者数グラフではピークを示すが、図-8では谷間を示しているのである。8月を除く、4月～7月および9月～3月について比率の変動はむしろ図-6の各月入館者数グラフと相似性があると言える。図-8を通過して言えることは、総じてではあるが5月～7月、9月～12月には団体入館者が50%を超過し、8月および1月～2月では50%を下回ることが多い。なお3月～4月では団体入館者数が増加への傾向があると言えるであろう。

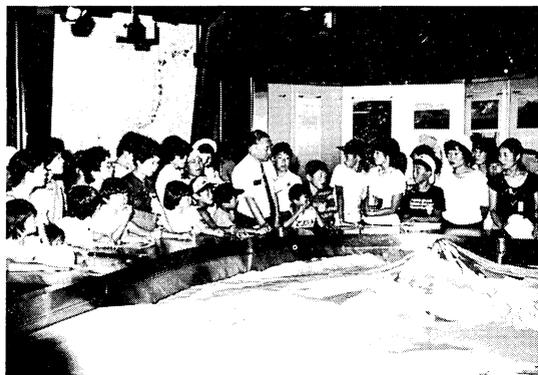


写真-1 地質標本館 一生活と地質現象展示室における見学者



写真-2 地質標本館玄関ホールで毎年夏に行なわれる「岩石・鉱物・化石の相談日」の様相

7. 考察

以上、主として2項から7項にわたり、昭和55年8月から昭和61年11月にかけての入館者の年別変動、地域別入館者数の年別変動、職業別・学業別入館者数の年別変動、入館者数の月別変動、団体別・個人別入館者数の年別変動と月別変動を、表-1および図-1～8にもとづいて分析し、かつ論説を試みてきたが、可能な限り随所で考察を進めてきた。

したがって、ここではむしろ考察と言うよりもむしろ、総括とか結論と言った方が妥当かも知れない。

昭和55年8月19日から一般公開をはじめた地質標本館は昭和61年8月19日で6周年を迎えたわけであるが、ここにはじめて入館者の分析的研究をまとめてみて、いろいろなことがわかってきた。これこそ大きな発見であると言える。簡単に下に列記してみよう。

- a. 入館者数は各年度毎に、かつ各月毎に変動がある。
- b. 各年度毎の変動は、地質標本館の場合、EXPO'85-TSUKUBAの影響を多くうけている。
- c. 各月毎の変動は、EXPO'85-TSUKUBAの影響は勿論であるが、むしろ一般社会の旅行シーズンと密接に連動している。
- d. 地質標本館の入館者数の約2/3は団体入館者数である。
- e. 入館者層が次第に学生・生徒へ移行、すなわち増加の傾向にあり、設立の目標に近づきつつある。地質調査所の研究業務と地球科学とが若年層に浸透し、かつ普及されることは極めて重大である。
- f. 地質標本館の玄関ホールで毎年8月に1日間に限って実施してきた「岩石・鉱物・化石の相談日」の成果は著しく、地質標本館の社会的評価も高まっている。
- g. 地質標本館主催の講演会および地質見学会の実施も必要であろう。
- h. 入館者数の増大は非常に重要な事項であるが、それにも増して重要なことは見学者が何を望んでいるかを明確に認識し、そのような要望に答える陳列展示へ一歩一歩近づけていくことも今後の課題として重要である。
- i. 今回の入館者数の分析だけでは十分とは言えない。今後、さらに検討の余地がある。

8. あとがき

今回の分析的研究ははじめて試みられたものであるが、前項の考察において結論したように、いろいろな角度か

ら検討することができてその成果は今後の地質標本館の発展に大いに役立つことと期待している。

おわりに、本論文をまとめるにあたり終始有益な御指導と御教示とを賜りました、埼玉大学名誉教授新井重三先生に心から感謝の意を表します。地質標本館レーアウト小委員会で入館者問題について御検討いただいた丹青総合研究所の佐々木朝登副所長、地質標本館の管理・運営に御協力いただいている関係者各位に厚く御礼申し上げて擱筆する。

参 考 文 献

1. 鈴木泰輔(1982):地質標本館だより一開館1年を
ふり返って,地質ニュース329号。
2. 白鬚弘次(1983):地質標本館だより一開館3年を
迎えて,地質ニュース352号。
3. 神戸信和(1984):地球科学系展示の1例としての
地質標本館,日本展示学会,“展示学”第1号。
4. 神戸信和・坂巻幸雄・尾上亨・豊遥秋・白鬚弘次
(1984):地質調査所地質標本館の利用実態—学校
・社会教育教材として,日本地質学会第71年学術大
会講演要旨集。
5. 神戸信和・滝沢朝代(1987):「岩石・鉱物・化石
の相談日」と「入館者20万人達成」,地質ニュース
389号。